

木材業に着目した堀川の水辺空間とその利用の変遷

中川 晃太¹・中村 晋一郎²

¹ 学生会員 名古屋大学大学院 工学研究科土木工学専攻 (〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町)
E-mail:nakagawa.kouta@c.mbox.nagoya-u.ac.jp

² 正会員 名古屋大学大学院講師 工学研究科土木工学専攻 (〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町)
E-mail: shinichiro@civil.nagoya-u.ac.jp

都市河川は人々の生活と密接に関わり合うことでその価値を發揮し、地域の個性を規定してきた。水辺空間の使われ方はその地域の個性を反映しているといえる。名古屋市を流れる堀川は木材の川として名古屋の発展を支えてきた。本研究では、堀川を対象に水辺空間を規定してきた木材業に着目して、水辺空間利用の変遷を追い堀川の空間的な特徴を明らかにする。

手法としては、統計データと住宅地図から木材業の衰退と沿川の木材業事業所の空間分布の変遷を明らかにし、さらにヒアリング調査や資料収集によりヒューマンスケールでの空間利用の変化について分析を行った。以上の調査・分析から、木材業を介した人と川の濃密な関係性こそが堀川の個性であり、それが護岸の形態や左右岸での利用形態の差異という空間的特徴として表れていたことを明らかにした。

Key Words: river restoration, waterside, urban river, canal, landscape, lumber, Horikawa River

1. はじめに

(1) 背景と目的

都市における河川や運河などの水辺空間は、かつて物流の大動脈としてわが国の経済活動を支える賑わいのある場所であった。またこのような水辺は各地の風土に根付いた文化・歴史を形成し、人々の生活と密接なかかわりを持っていた。しかし、戦後の高度経済成長以降、モータリゼーションの進展により水運はその役目を徐々に失い、急激な都市化・産業化により河川・運河は排水路とみなされ、これにより水質の悪化、悪臭が問題となり、埋め立て・暗渠化される事例もあった¹⁾。建物も水辺に背を向けて建てられることが多くなり、かつての人と川との関わりは絶たれてしまった。

1960年代に水質悪化や公害問題を契機に河川再生の必要性が認識され、1970年代以降急激な成長の時代が終わると水辺空間の憩いの場、賑わいの場としての価値が見直されるようになり、河川の自然環境の再生・保全、親水の向上を目指して行政や民間による取り組みが行われるようになった。河川改修と川沿いのまちづくりを一体的に行い、周辺の歴史・文化に配慮し良好な水辺空間を整備することを目的とした「ふるさとの川整備事業」(1987)、都市部において沿川市街地の整備と河川改修

をあわせて進め水辺環境向上に配慮した河川改修を行うことを目的とした「マイタウンマイリバー整備事業」(1988)などの制度的枠組みが作られ、さらに1997年(平成9年)の河川法改正では、河川管理の目的として従来の「治水」、「利水」に加え、水質、景観、生態系等を含む「河川環境」の保全と整備が行われることとなった。このように、1980年代以降全国で水辺の再生が進められている。しかしこれまでの水辺再生の事例では、冒頭で述べたような人と川の関わりや物流の再生といった、歴史的文脈にもとづいて再生された事例は極めて少ない。

名古屋市の中心部を南北に流れる堀川もまた「マイタウンマイリバー整備事業」第一号として整備が進められ、さらに2012年に「堀川まちづくり構想」が発表されるなど、今まさに再生に向けての取り組みがされている都市河川のひとつである。堀川の水辺の再生を考える際、最も重要なモノとして、木材がある。開削時から白鳥(熱田区)に日本最大級の水中貯木場を持ち、木曽材を中心とする木材の一大集散地であった。名古屋城より下流の多くの地域で河岸には材木商や製材所が軒を連ね、水面には筏をびっしりと係留していた。そのため、堀川の水辺空間は木材と、木材を介した人々の活動によって規定されていたといっても過言ではなく、沿川に材木店、

製材所が建ち並び、水面に多くの丸太を浮かべている水辺の風景は堀川の本風景であるといえる（写真-1）。

本研究では、堀川の木材業に着目し、堀川を取り巻く状況が激変した戦後から現在に至るまでの時期の木材業を中心とした水辺空間利用の変化を追い、堀川の空間的特徴を明らかにすることで、人と川の関わりや物流の再生といった歴史的な脈にもとづいた水辺再生への基礎研究として資することを目的とする。

(3) 堀川の水辺空間に関連する既往研究

堀川についての既往研究として、野口ら²⁾は堀川沿いの歴史的建造物に着目し、木造の建築物、堀川沿いから移築された建築物、木造以外の建築物に分類してそれぞれ列挙し解説している。商家、倉、住宅などの各建築物について構造、材料、間取り、外観上の特徴について詳しく述べられている。佐藤ら³⁾は、堀川と幹線道路の繋がりに着目して、河川空間の構成要素とその空間実態について調査している。沿岸の敷地面積や建物の開放性について調査し、堀川を中心とした空間の景観的な特徴を明らかにしている。しかし両者とも堀川全体を見渡す議論や時期ごとの変遷、水面の利用について、また沿川の文化や住民の生業に注目する視点はない。

また、堀川を対象にしていないが、瀬口ら⁴⁾はかつて堀川とともに名古屋を代表する運河であった中川運河について、運河の機能である物流に注目して運河の利用実態とその変化、またそれが周辺の土地利用へどのように影響するかを調査し、さらに輸送路としての役割を終えたこれからの運河の整備計画の在り方について考察している。しかしヒューマンスケールでの沿川の水辺空間と運河利用の関係には触れられておらず、統計資料などをもとにマクロ的な視点で考察することどまっている。

以上より、今後の堀川再生の在り方を考える上で極めて重要な堀川沿川の生業に着目した水辺空間利用の変遷はこれまで明らかにされていない。

2. 研究の手法

本研究では、次の3つの調査・分析を行い、堀川の水辺空間利用の変遷を追い、堀川の個性を明らかにする。

- [1] 統計データによる堀川と木材業衰退の分析
- [2] 堀川沿川の木材業事業所の分布と空間利用
- [3] 堀川の代表的な水辺利用の変化

以上のそれぞれについて歴史的な変遷を明らかにした比較、分析することで空間利用の変化の全容を明らかにする。[1]では今回独自に入手した港湾統計や文献などの資料から堀川の木材を取り巻く歴史や、輸移入・輸

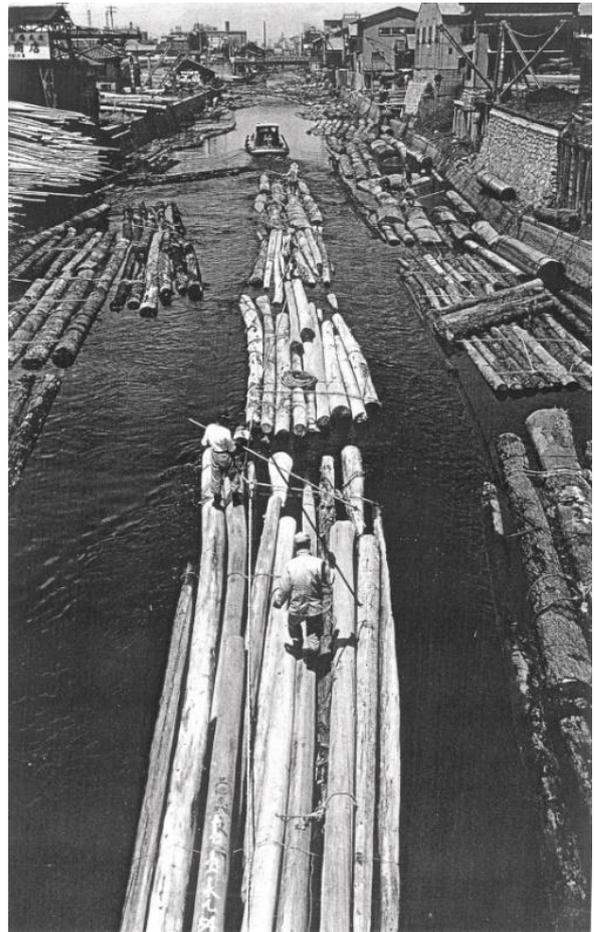


写真-1 堀川の筏（山王橋、1968）

出典：寺西次郎「変貌—名古屋の昭和を撮る」（1999）

移出などの取引量、航行の状況の変化を調査し、空間分析の対象時期を特定する。[2]では、[1]の調査で堀川の木材業の急激な衰退がはじまったと明らかになった1960年から現在に至るまでを対象とし、1960年から現在までの住宅地図から材木業事業所（屋号に“材木”、“木材”、“銘木”、“製材”、“木場”、“木工”、“挽材”のいずれかを含むもの）を抽出し、およそ10年ごとに2万5千分の1地形図上にプロットして個数と空間分布の変化を追い、さらに堀川沿川の土地利用の変化を明らかにする。用いた住宅地図は、住宅地図協会発行「名古屋市全商工住宅案内図帳」（1961~1982）、ゼンリン発行「住宅地図」（1985~2014）である。[3]では、現存する木材業事業者2件（堀場木材、丸ス松井材木店）にヒアリングを行い、堀川を生業の場としてきた人々の目線から見たヒューマンスケールでの水辺空間の利用とその変化を把握し、また検証を行う。同時に、現地調査と過去の写真や標準断面図の収集を行い、堀川の水辺空間の実態を明らかにする。[1]~[3]の調査を踏まえ、堀川の水辺空間の特徴とその個性について考察する。

対象区間は、かつて堀留であった朝日橋から河口部までとし、木材の需要や輸送方法が大きく変わったと考え

られる 1950 年以降について調査する。

3. 堀川の概要

(1) 堀川の開削とその地形

堀川は、1610 年（慶長 15 年）に名古屋城築城と城下町整備のための資材運搬用の運河として名古屋台地の西の縁を沿うように開削され、名古屋城と熱田の湊を結んでいた。その後南北に拡張され、現在庄内川を水源とし、庄内川水系に含まれる延長 16.2km の一級河川となった。水野⁹⁾によると、開削による土砂は右岸に運ばれ川に沿って土地が盛り上げられており、特に堀留から納屋橋までの地域には荷上場、商家、蔵を整備するためにこの土砂が役に立ったことが示されている。下流では土砂による盛り上げは次第に低くなり、尾頭橋付近では堤防の上の盛り土は少なく、右岸には低く平らな土地が広がっている。

堀川は江戸時代より城下町に住む人々に食料などの生活必需品や木材を運ぶ重要な航路であり、河岸蔵や物揚場が多数整備された。近代に入り産業化が進むと、輸送路としての役割はさらに増し、名古屋地方の水運ネットワーク構築を目的とした運河網計画に組み込まれた⁹⁾。

また堀川は舟運の幹線であると同時に、古くから人々の憩いの場として親しまれてきた。日置橋付近では江戸後期に桜が植えられ、かつては名古屋一の桜の名所であった⁷⁾。

(2) 堀川と木材

堀川は藩政時代より木曾材を中心とする木材の集散地であった。名古屋港完成後は外材も輸入するようになり、大正になり取扱量は急激に増えていった。入荷した木材は、品質を保持するために水中貯木する必要があり、堀川の水面にはたくさんの筏が係留され船の航行に支障が出るほどであった⁸⁾。

白鳥貯木場は、開削時には資材置き場として利用されていたが、木曾山が尾張藩領になって以来、飛騨・木曾から切り出された木材は筏に組まれて木曾川を下り、伊勢湾を經由して熱田の七里の渡しから北上し白鳥貯木場へ送られていた。筏輸送が鉄道輸送に変わった後も白鳥貯木場には貨物専用の白鳥駅が設置され、昭和まで木材を取り扱っていた⁹⁾。

名古屋城築城時、五条橋から伝馬橋までの堀川左岸には元材木町・上材木町・下材木町の材木三カ町があり、清洲やほかの地域から集められた材木商集められていた。またこの地区には木挽き職人も居住しており、堀川左岸は木材産業によって栄えていた。時代とともに物流の拠点は南下し、もともと木場のあった日置地区・古渡地区、さらに戦後は西部木材港へと移っている。

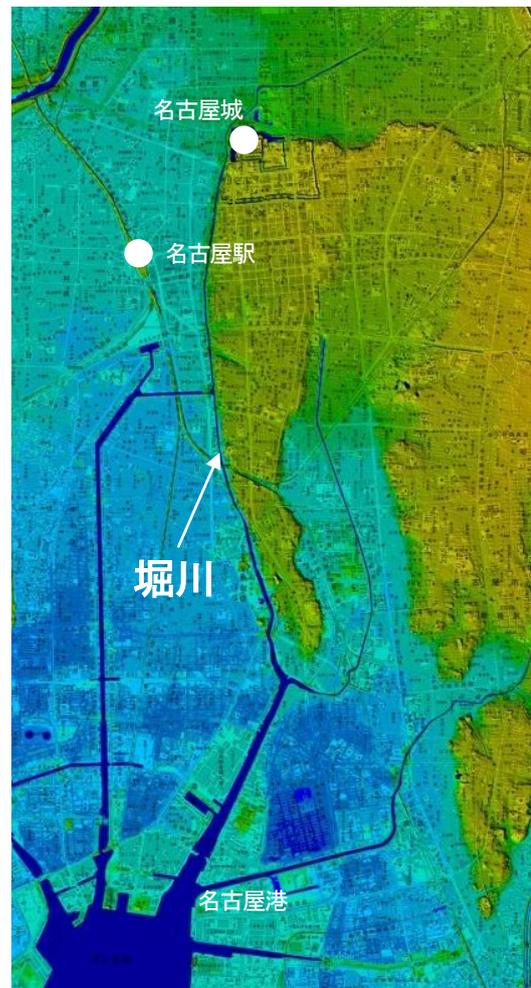


図-1 堀川の地形

出典：国土地理院 2万5千分の1デジタル標高地形図「名古屋」(2006)

このように、堀川はまさに「木材の川」であり、名古屋と堀川の繁栄を象徴する姿であった。また新修名古屋市史第9巻民俗編¹⁰⁾には「筏に組んだこの材木は子どもたちにとって格好の遊び場で、上手に飛び跳ね、走り回って遊んだ」とあり、堀川は都市において貴重な水に親しむ機会を子どもたちに与えていたことがわかる。

4. 結果及び考察

(1) 木材業に関する統計データの分析

今回独自に収集した堀川と木材業に関する各種統計のデータを図-2～図-4に示す。ここから堀川の木材業の衰退の時期や転換点を探る。

堀川を含めた名古屋港全体への木材の輸移入は、戦後復興用材の需要の増加や木材統制の撤廃などの背景を受け、1970年ごろまでに右肩上がり急増しており(図-3)その後も安定した輸移入量がある。しかし、名古屋港経由の堀川への入港船舶と木材輸移入量はこの時期に激減している(図-2, 図-4)。これには、1968年に名古屋

屋港に西部木材港が開港したことが大きく関わっている。西部木材港は、堀川沿いに事業所が飽和していたこと、また 1959 年の伊勢湾台風で流出した木材が大きな被害を引き起こしたことを受け、木材取引の新たな一大集積地として整備された。西部木材港に入る木材は、開港後 10 年間で全体のおよそ 8 割に上っている。

そのため、堀川に直接入る木材は激減したが、港からの曳航は 2000 年ごろまでであったことがヒアリング調査で明らかになっており、1970 年代に堀川から船が消えたというわけではない。しかし、自動車輸送への切り替わりと木材需要自体の落ち込みには逆らえず、事業所数は減少し続けている。

以上より、1960 年代を境に堀川の木材業が大きく変化したことが読み取れる。よって堀川の水辺空間の変遷を探る上でも 1960 年代以降を対象とするのが適切と考えられる。

(2) 堀川沿川の木材業事業所の分布

次に、前節で堀川の木材業の急激な衰退がはじまったと明らかになった 1960 年代から現在に至るまでを対象とし、1960 年代から現在までの住宅地図から材木業事業所を抽出し、堀川沿川の土地利用の変化を明らかにする。図-5 に木材業事業所の空間分布の変遷を、図-6 に左右岸別の事業所数と堀川での木材輸移入量を示す。

昭和期の木材産業の中心地は日置・古渡地区であり、現在でも事業所が残っている。堀川の木材業のルーツである旧材木三カ町（元材木町，下材木町，上材木町）ではこの時期既に衰退している。白鳥貯木場より下流の堀川口エリアでは大規模な工場が多く立地し、木材業事業所は少ない。時代とともに木材取引の拠点は変化し、材木三カ町から熱田の白鳥貯木場、そして 1968 年以降は名古屋港西部木材港と南下し、輸送を楽にするため事業所は徐々に南へ移転したり支店を出したりするようになり、日置・松重地区が中心地となったと考えられる。しかし、堀川への木材輸移入量の変化が示すように衰退の傾向は大きく、どの地区でも事業所は減り続けており、1961 年の 219 軒から 2014 年には 11 軒にまで減少している。木材業や水運の衰退は、貯木場や鉄道（貨物線）の変化からも読み取ることができる。白鳥貯木場では 1979 年に一部が売却され、1980 年には堀川口駅が廃止、1982 年に白鳥駅が廃止された。これ以降貯木場の面積が次第に小さくなっている。貯木場が埋め立てられた跡地は 1989 年に世界デザイン博の会場として使用され、現在は国際会議場や公園、大学などになっている。このように、木材に関連する施設は木材業の衰退とともに次々と他の用途へ転用されていった。1961 年当時材木店だった敷地は、左右岸ともに駐車場や集合住宅に転用されている。プロムナードとして整備されている箇所も

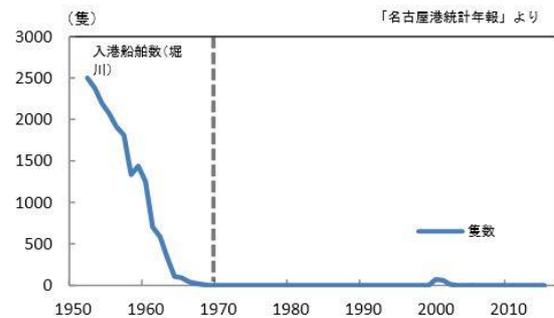


図-2 入港船舶数（堀川）

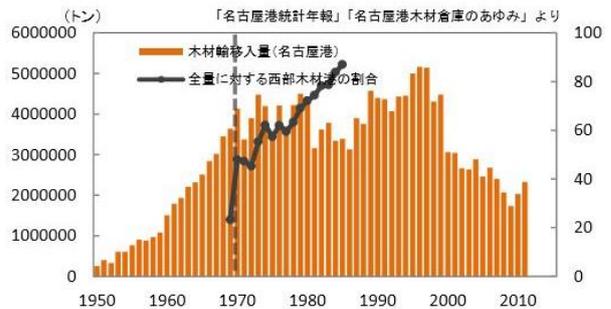


図-3 木材輸移入量（名古屋港）

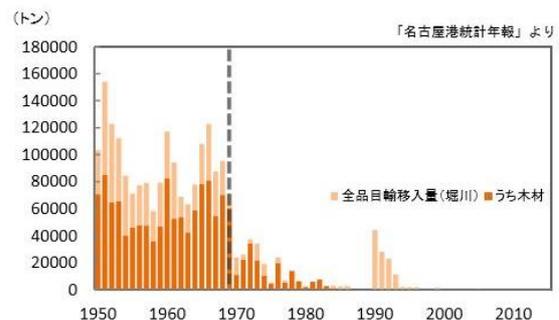


図-4 全品目輸移入量（堀川）

一部ある。

左右岸の違いにも着目してみると、全体的に左岸に事業所が多いことがわかる。特に上流域では、名古屋城築城と城下町の整備という歴史的背景から左岸に集中している。つまり、堀川の地形や利用方法は左右岸で大きく異なり、この左右岸の非対称性は堀川の水辺空間を特徴づける重要な特徴であり個性であると考えられる。次節ではヒアリング調査、現地調査によって詳細な堀川の水辺の姿を明らかにするわけだが、左右岸の違いにも注目し把握、検証していくこととする。

(3) 堀川の水辺利用の変化

a) ヒアリング調査

前節では、堀川全体の沿川の利用状況を俯瞰的に分析してきた。次に、沿川で古くから木材業を営む方々への過去の水辺利用やその変化についてヒアリング調査を行った。ヒアリングでは、木材業が栄えていた頃から現在

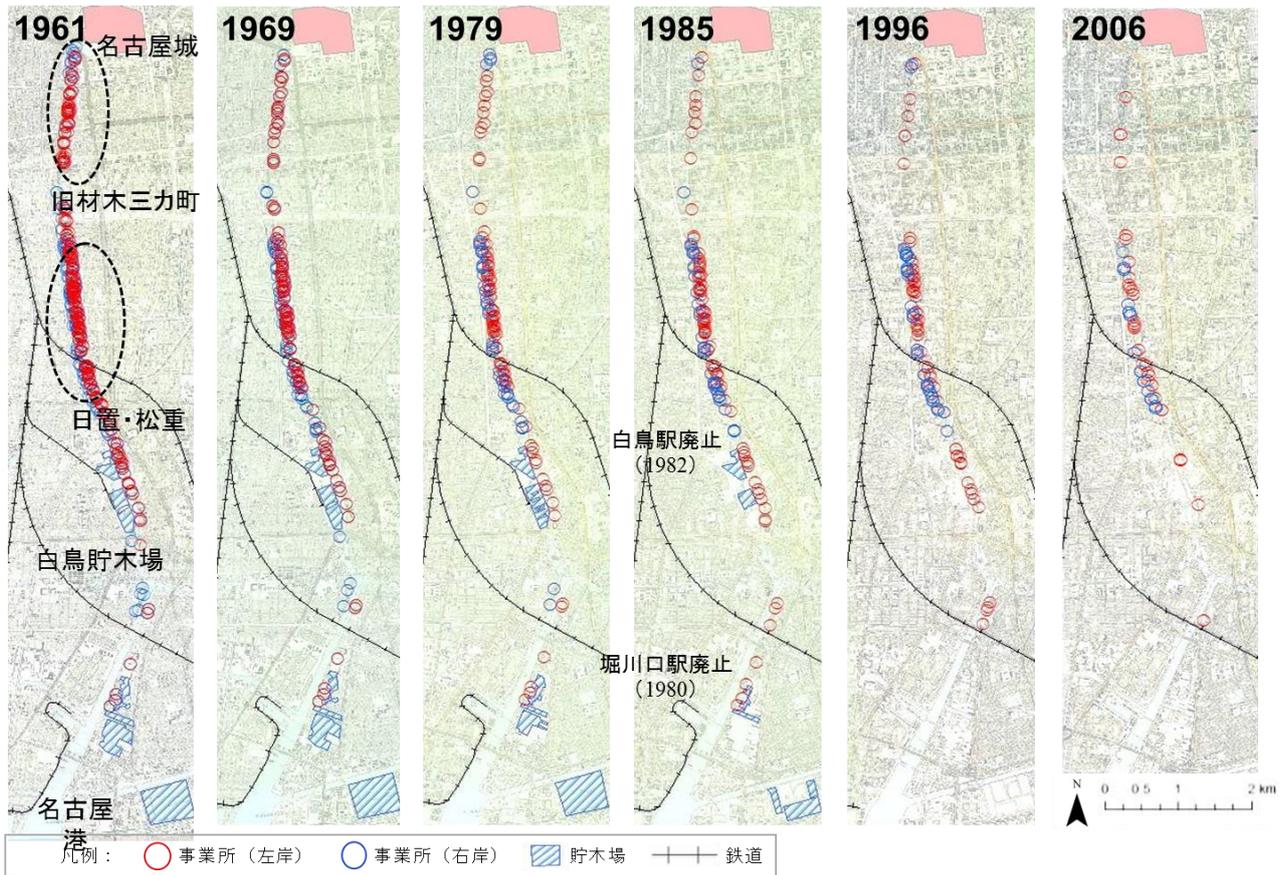


図-5 木材業事業所の分布の変遷 (2万5千分の1地形図に加筆)

までを思い起こしてもらい、水面の筏や船の様子、材木を扱う上での水辺の使い方、周辺の地形およびその変化を中心に話を伺った。これまでの分析で新たに得た視点である左右岸での利用の違いを探ることに留意した。対象者は、山王橋すぐ下流側右岸の堀場木材の堀場氏、住吉橋下流右岸の丸松井材木店の松井氏である。

ヒアリング調査では、昔の水辺の様子、左右岸の地形や立地の特性に関する話題だけでなく、木材業全般名古屋港の統計ではわからなかった水運の実態などについても詳しい言及があった。河岸に関しては「材木を引き上げとったところは(部分的に)岸壁がない。満潮の時に材木を引っ張って上げとったわけだ。」、「こっちべた(右岸)は湿地帯みたいな、池がいっぱいあったりとかそんな感じだった。」、「向こう(左岸)には最初木材商、仲卸のようなそういうお店がだだだとして、西側には後発組が作った。」などの発言があった。その他、10年ほど前まで筏が水面を覆いつくしていたこと、橋から橋の間で同業者の組合があったことなどの証言が得られた。

b) 堀川の水辺空間の構成

以上の調査より明らかになった堀川の水辺空間の変化を、日置・松重地区と熱田地区よりヒアリングを行った場所付近の2地点の断面図を示す(図-7, 図-8)。断面

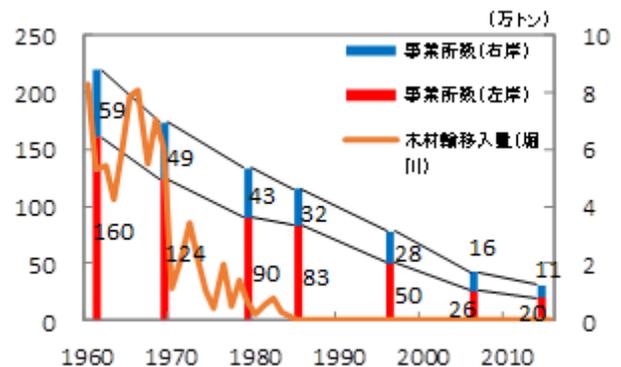


図-6 左右岸別の事業所数と堀川の木材輸移入量

図は、河床断面は名古屋市緑政土木局河川部河川工務課所有の標準断面図を基に作成し、水面の木材や河岸の建屋については写真を参考にした。

山王橋～古渡橋間では、1960年頃は右岸側にゆとりをもった敷地があり、貯木場や製材所が立地していた。現在でも大規模な商業施設が並んでおり、用途は違うが広い敷地を確保できる特徴は受け継いでいる。左岸は河岸ぎりぎりに用地があるのが特徴で、かつて水辺にはクレーンが並び背後の斜面にも木材業事業所が密集していた。

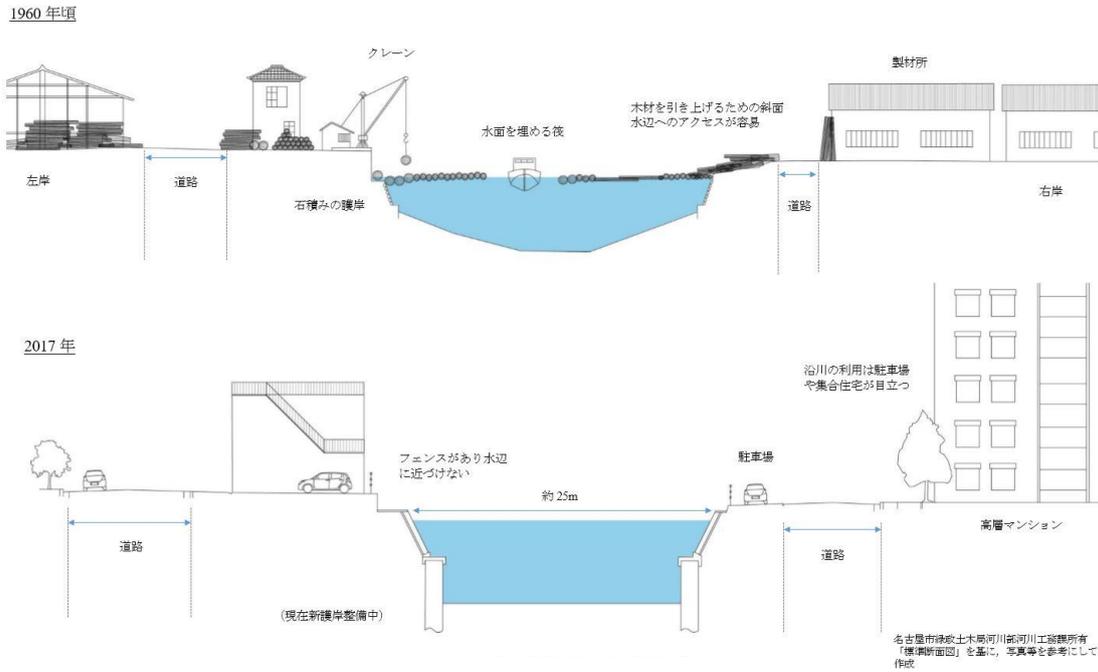


図-7 山王橋～古渡橋間の水辺空間（断面図）

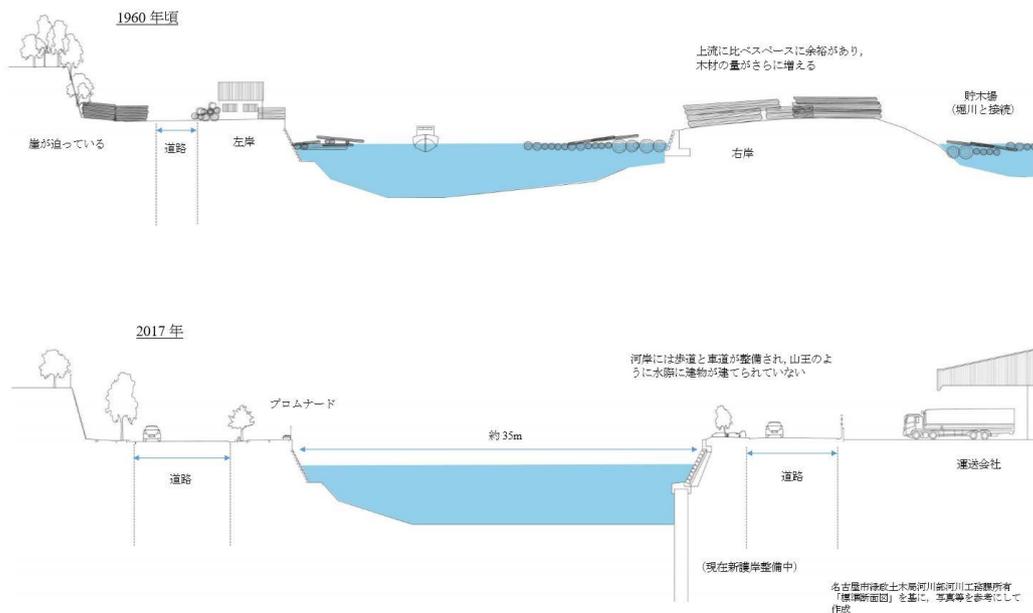


図-8 住吉橋～瓶屋橋間の水辺空間（断面図）

住吉橋～瓶屋橋間は、山王地区に比べ川幅が広がる。水面との高低差も少なく、クレーンは少なかった地区である。左岸側は台地が崖となって迫っており、河岸の利用がより制限されている。岸に張り付いていた用地は改修によりプロムナードになっている。

5. おわりに

本研究では、堀川の水辺空間を規定していた木材業に着目し、水辺空間利用の変遷を追ってきた。得られた成

果は次のとおりである。

- 堀川と木材業に関わる統計資料を独自に収集しそこから 1960 年代以降に木材業が急激に衰退したことを明らかにした。
- 堀川沿川の木材業事業所の空間的分布の変遷とその特徴を明らかにした。
- ヒアリング調査と過去の写真等から堀川の水辺空間の利用の変化を平面図、断面図を用いて再現した。

堀川は、名古屋城と城下町の整備のために開削された運河であり、以来木材をはじめとする様々な物資を運搬または保管し、名古屋の繁栄を支えてきた。水面は筏と行き交う船で賑わい、岸では材木などの積み下ろしが絶え間なく行われてきた。堀川は輸送路として、また生業の場として人がより容易に水面に近づけるような空間形成が地形に寄り添う形で積み重ねられてきた。水面の筏や船だけでなく、水辺へアクセスできるポイントが河岸に多数あったこと、左岸の荷揚げ用のクレーンや右岸の規模の大きな製材所などに代表されるような、左右岸でそれぞれの地形に合わせた空間利用がされてきたこと、環境と調和した石段や石積みの護岸が使われていたことなどの空間的特徴がその要素である。その結果、堀川には木材業を介した人と川の濃密な関係性が生まれた。これこそが堀川の個性であるといえよう。

これらは自然の営みのみから生まれたものではなく、すべて人と川との相互の関わりあいによって生まれた風景・文化である。森¹¹⁾は、都市河川が川の風景をかもしだすための必須の要件は市民とのふれあいであるとし、「使われない川は死んだ川である」と述べている。つまり都市河川における個性とは、水辺空間が「どのように使われてきたか」ということであり、堀川は運河として使われることでその価値を發揮してきたのである。

水辺の個性を最大限引き出し魅力ある都市の実現するためには、まずは人に使われなければならない。使われる空間であるために、過去の歴史からその川の個性を反映する文化や景観を特定し、過去の人と川との関わりを掘り起こすことでこれからの水辺再生の手がかりを得ることが必要である。

謝辞：研究にあたり、堀場四郎氏（堀場木材）、松井右近氏（丸松井材木店）にはお忙しい中ヒアリング調査にご協力頂きました。また森田峰子氏（名古屋港管理組合）、鷺崎巳和氏（名古屋市緑政土木局）には堀川についての資料提供とご教示を賜りました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 中村晋一郎・沖大幹：36 答申における都市河川廃止までの経緯とその思想，水工学論文集，第 53 巻，pp.565-570，2009
- 2) 野口英一郎，神谷昇司，水野信太郎，水野由美：名古屋堀川沿いの研究，日本建築学会東海支部研究報告警第 45 号，pp.725-728，2007
- 3) 佐藤圭二，長尾将司，石塚悠圭，松山明：名古屋堀川運河の景観と課題-名古屋都心空間の魅力の研究，日本建築学会東海支部研究報告書，506 第 52 号，pp.621-624，2014
- 4) 瀬口哲夫・河合正吉：名古屋市における中川運河の変容に関する研究，土木計画学研究・論文集，No.16，pp.255-263，1999
- 5) 水野時二：堀川の研究，4p，1993
- 6) 伊藤正博・沢井鈴一：堀川 歴史と文化の探索，あるむ，pp.169-170，2014
- 7) 伊藤正博・沢井鈴一：堀川 歴史と文化の探索，あるむ，pp.27-28，2014
- 8) 伊藤正博・沢井鈴一：堀川 歴史と文化の探索，あるむ，pp.200-219，2014
- 9) 西別府順治：名古屋港と三大運河，中日出版社，pp.26-37，2011
- 10) 新修名古屋市史編集委員会：新修名古屋市史第 9 巻，pp.451-452，2001
- 11) 森清和：調査季報 76，pp.3-9，横浜市企画財政局都市科学研究室，1982

(2017.4.28 受付)